華叟宗曇とその門下

付資料二篇　一、大機弘宗禅師行実碑銘
　　二、養叟和尚法語

平野宗浄

一

大応、大灯の正系として初期の祖師中、言外宗忠と華叟宗曇にのみ語録が残っていない。それ故その禅風及び思想を知るには、他の残存する資料から推量するより他に方法はない。言外宗忠についての考察は後日にゆずるとして、今はその門下に養叟、一休という逸材を出し、大徳寺仏法発展の基点となった華叟宗曇についての考察を試みる。華叟については延宝伝灯録[1]、本朝高僧伝[2]にその伝記があるが、この二つ共、実は宝徳四年（一四五二）にその門人によって編集された大機弘宗禅師行状に依っている。この行状記は寛文二年（一六六二）、大徳百八十二世雪庵宗圭によって作られ、華叟の開創になる祥瑞寺に現存する大機弘宗禅師行実碑銘によってのみその全貌を知ることが出来る。しかし、延宝伝灯録の華叟伝及び養叟伝、宗秀侍者伝と本朝高僧伝の華叟伝を合せて読めば殆んど行実碑銘と近いものになるので、おそらく師蠻が依った大機弘宗禅師行状と、現存の行実碑銘の内容は同一のものと推察される。

(1) 大日本仏教全書、延宝伝灯録第一、巻二十九、三八四頁。
(2) 大日本仏教全書、本朝高僧伝第二、巻四十、五五四頁。

二

さてそのとぼしい資料の中から華叟の禅風について最も重要と思われるものを二、三、摘出して考察してみることにする。先ずその第一は華叟が大徳寺に出世しなかったことである。大灯下の正系としての法系中、大徳寺に出世していない人は他に無いのではないか。ところが現代ではそれを誤り伝えて大徳寺世代に華叟を入れているのである。この誤りは明治以前には無く、すべて明治以後、しかも学問の世界で信頼されている読史備要、望月仏教辞典が誤っていることは注意する必要がある。先ず。禅学要鑑[1]、日本仏家人名辞書[2]、禅宗辞典（中山書房刊）[3]茶道文庫[4]の紫野大徳寺（佐藤虎雄博士著）は華叟を大徳寺二十二世としている。読史備要[5]、望月仏教大辞典[6]は華叟を大徳寺二十三世としている。皆誤りには違いないが、このように世代の相違が出来ているのはどうしてかというと、大徳寺は元来開山大灯国師を以て開山として世代の上に位置づけ、徹翁義亨を大徳寺第一世とするのである。これは大灯国師年譜[7]も、正灯世譜[8]も、竜宝山住持位次[9]も大徳寺系の記録によればすべて徹翁義亨は大徳寺第一世である。これを第二世と誤り伝えた最初はおそらく師蠻であろう。その著書延宝伝灯録[10]に徹翁を第二世としているのである。これは師蛮が大徳寺派の僧でなかったからではなかろうか。とにかく世代順だけでも、これで読史備要、望月仏教大辞典は大徳寺開山以来、現代の五百数世までをすべて間違えてしまったということになる。

前述した如く、華叟が大徳寺に出世したという資料は明治以前にはない。その根本資料である行実碑銘、及び延

宝伝灯録、本朝高僧伝のどれをとっても大徳寺に出世した事実はない。正灯世譜には贈大徳とのみあって何世とは書いていない。これは華叟没後、後花園天皇が大徳寺の前住位を追贈されたのであって、世代に入ったことではない。

竜宝山住持位次には第二十二世華蔵和尚となっている。華蔵と華叟は号が似ているし、ちようど時代が華叟に合う事から誤ったのであろう。筆者の推察であるが同時代に妙心寺派で華蔵曇禅師という人がある。この人は妙心二世授翁宗弼の法嗣といわれているが、応永十九年（一四一二）に没しており、華叟（正長元年―一四二八―没）とは同世代である。大徳寺第二十一世の香林宗簡の年代記録は明かではないが、第二十世季嶽妙周の在住の時、大徳寺が十刹の九位になったという記録があり、それは康暦二年（一三七九）であるから、年代的に考えても華蔵曇が大徳寺に出世することは充分考えられる。その号、諱も華蔵曇と華叟曇であれば誤る可能性が大きいといわねばならない。ともあれ大徳寺第二十二世は少くとも華蔵とすべきであって華叟とすべきではない。この事の傍証として大徳寺塔頭、真珠庵に次のような華叟和尚真筆の貴重な資料がある。

徳禅寺住持職の事、雖重蒙仰候、如先立申候、老体病気、毎事無正体感候間、罷上事不可叶候、此由預御披露候所仰候。恐惶謹言

二月二十七日　　宗曇花押

雲門庵侍真禅師

これは本山から華叟へ徳禅寺の住職になってくれとの拝請に対して、華叟から本山への断り状である。当時大徳

寺住職になるには前の段階として徳禅寺住職になるのが不文律であったようで、徳禅寺住職すら断っている華叟が大徳寺には勿論住職する筈がない。

以上で華叟が大徳寺に住職していないことの証明は充分出来たと思うが、何故このことにこれ程こだわるかというと、これが華叟の禅風の最も大きな特色であるからである。これは禅の本質と、禅者の組織体である教団、即ち禅宗との関係につながる。教団の最高の地位にある者は常に禅を最も深く体得しているという大きな錯覚が此の頃にも既に根強いものがあったに違いない。（いつの世でもそうであるが）。そこで禅の本質は教団と何の関係もないということを身を以て示したのが華叟であった。この純徹な、反骨的禅風はその愛弟子、一休に継承されるのである。華叟の反骨精神は静的であり、黙殺型であったのに対し、一休のそれは動的であり、攻撃型であったといえよう。

(1) 禅学要鑑、十二頁。
(2) 日本仏家人名辞書、三四一頁。
(3) 禅宗辞典、十二頁。
(4) 茶道文庫六、紫野大徳寺、附録三頁。
(5) 読史備要、一〇一八頁。
(6) 望月仏教大辞典、六巻、附録七九頁。
(7) 大灯国師年譜、三十六頁。
(8) 増補正灯世譜、徹翁義亨の項参照

(9) 竜宝山住持位次、続群書類従第四輯下、補任部巻九十九、五五七頁。
(10) 大日本仏教全書、延宝伝灯録第一、巻二十一、二八五頁。
(11) 大日本仏教全書、延宝伝灯録第一、巻二十八、三七一頁。

三

反骨精神と並んで華叟の禅風の特筆すべきものは聖胎長養である。行実碑銘と本朝高僧伝宗曇伝に「師曰、吾先師の印証を得てより二十年、仏法の二字を道わず、今日始めて你が為に口を開く」とある。これは華叟の発明した事ではない。曾て宗峰妙超が南浦紹明のの下で修行していた時大悟徹底し、その時宗峰が南浦に投機[1]の偈を示した、それに対して南浦が「只是れ二十年長養して、人をして此の証明を知らしめよ」と云っている。大燈は勿論これを実践したわけであるが、その後この二十年長養の精神をそのまま実践し、又はっきりと言明したのが華叟に他ならない。勿論その間、徹翁、言外にその精神が無かったのではない。唯個性的禅風とまでならなかっただけのことである。秋霜烈日の枯淡な華叟の禅風は、やはり宗峰以来徹翁、言外と引継がれたものであることは、それぞれの言句行状を見れば明瞭である。徹翁は栄衒[2]の徒に示す法語を作り、衆を集めて説法したり、名利を求めたりする輩をきつくいましめている。言外は「参禅[3]の士は須らく一衣一鉢にて行脚すべし、若し剰物を蓄えば我が徒にあらず」と常に云っていた。華叟はその受業師徹翁に仏心と呼ばれていた程純粋な人であったから、この二師の精神をその

まま実践し、あまつさえ応灯二祖の二十年長養までその通り実践したのであった。

さてこの聖胎長養二十年という事は修行という実践的な意味が表面に現れ易いが、それ以上に思想的な意味が大きい。これを思想的に考察した場合、前に述べた大徳寺に出世しない。世代に入らないという禅宗教団に対する反骨精神と相通ずるものがある。これを現代的な表現をすれば「断絶」ともいうべきであろうか。哲学的な用語を使えば非連続の連続といえるかもしれない。大徳寺の住職となって世代を次ぐことは単に連続的な意味しかなくて、そこに宗教的な何の意味もない、むしろ積極的にそういう世俗的な連続を否定してこそ真の宗教ではないか、そういう精神が華叟の中に見出されるのである。この「断絶」ということでここに特筆せねばならないのは、宗峰妙超の「億劫相別れて須臾も離れず、尽日相対して刹那も対せず」[4]という言葉である。この中には深い思想が含れており、現代の哲学者もしばしばこの言葉を引用している。多く観念的に、哲学的に弄れ易い言葉であるが、これはやはり禅精神を離れての解釈は無理であろう。

先ず、宗峰がその師南浦の処で修行中、雲門の関字の公案で大悟した時、南浦が「夜来夢に雲門大師吾が室に入る。儞今日関字を透る。你は雲門再来の人なり」[5]と称揚したのであるが、これが宗峰の「億却相別れて須臾も離れず」の思想の初まる最初であろうか、南浦の夢を別にしても、宗峰自身は数百年前の中国の雲門の関体験を現在即坐に、じかに自己体験し、億却相別れて須臾も離れずということを初めて深く体験したことは間違いない。これがその場の体験に止まらず、二十年長養として思想的にも実践的にも生活化されたということは応灯禅の一大特色であろう。聖胎長養といわれるものは、今日一般的に考えられているような、出世する前の一段階というようなもの

ではない。極端に云えば、「迎えに行かなければ宗峰は死ぬまで乞食をしていたかもしれないし、関山は死ぬまで伊深で牛を追っていたであろう」ということである。この二つの物語りはどこまで真実だかわからないが、しかしここに二十年長養の所謂、「断絶」の思想を見なければならない。

ここに華叟が二十年長養をはっきりと言明したことは、応灯の禅思想及び実践を堂々と宣言したことになる。しかしこれが華叟門下になると明かにこの点で二つに分裂してしまう。即ち養叟と一休である。一休における一休自身の虚堂再来思想並びに印可状の焼却[7]、印状[8]、法嗣の否定等は明らかに応灯以来華叟によって受つがれた断絶、又は億劫相別れて云々の思想の展開である。しかし養叟の方は法系としては正系であるにもかかわらず、そのような思想的特色が殆んどない。二十年長養に関しても、一休が「大灯[10]を挑起し、一天に輝す。鑾輿誉を競う法堂の前。風飡水宿、人の記するなし。第五橋辺二十年」という偈頌を作ったのを養叟が嘲笑したというが、養叟の禅風はそのようであったかもしれない。その法語を見れば平凡であり、形にはまったような感じを受ける。

(1) 大灯国師年譜、一一頁、真筆は大徳寺蔵
(2) 大和文華四十一号、一九頁、狂雲集三三、
(3) 大日本仏教全書、延宝伝灯録第一、巻二十九、三八四頁。
(4) 大灯国師年譜、三二頁、真筆は大徳寺蔵
(5) 大灯国師年譜、一一頁。
(7) 大和文華四十一号、六四頁。一休和尚年譜二一頁。
(8) 一休和尚年譜、一四頁。

(9) 自戒集、酬恩庵蔵

(10) 一休和尚年譜、一八頁。

四

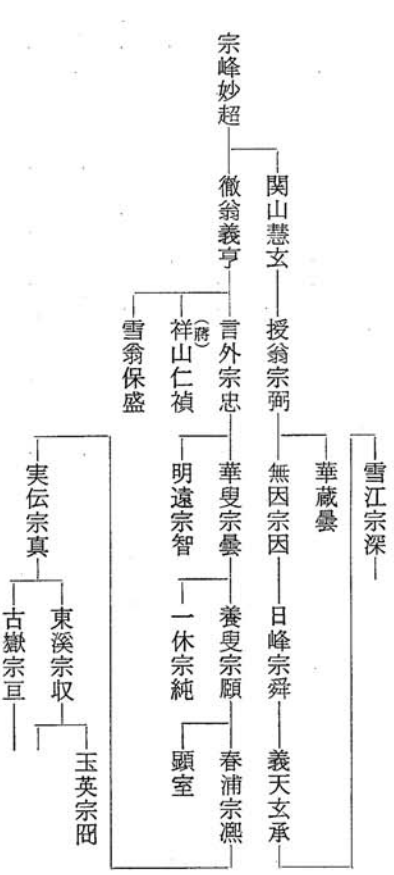
本論には新資料を二種発表することになった。共に華叟とその門下については欠くべからざるものであり。時代も古いものであるから自然に他に種々な材量をも提供することになることと期待する。前述したように華叟については語録がないので、他の資料に依らねばならない。本論文と、この二資料が華叟に関するその資料のすべてではなかろうか。此処に招介する碑銘は、碑文が宝徳四年（一四五二）後花園天皇から華叟に前住位と、大機弘宗の禅師号を贈られた時の記念に門人が集って編集したものであり、それは華叟没後二十五年のことであるから古さとしては申し分ない。此の碑の製作にしても寛文二年（一六六二）であるから、それですら延宝伝灯録よりも古いわけである。大徳寺初期の禅思想史にとっては欠くべからざる資料といわねばなるまい。

養叟和尚法語については、大徳寺初期の数少い語録の中の一つであることはいうまでもない。この語録は大永三年（一五二三）、大徳寺八十一世玉英宗㽦（けい）によって筆写されたものある。それを後、享保三年（一七一八）に大徳寺二百八十九世亭山紹云が極めを書いている。一見平凡な法語集に過ぎないようであるが、これから何が飛出してくるか全く未開拓の面白さを含んでいるといえよう。たとえばここに一つの問題を提起する。この語録の中に妙心開山

関山和尚百年忌拈香之頌というのがある。これは明かに養叟が生前、妙心開山、関山の百年忌があって、その時彼が拈香をした時の偈頌に相違いない。関山の没年は今までの資料によれば延文五年（一三六〇）である。そうすると百年忌は一四六〇年、寛正元年ということになる。しかし養叟の没年は長禄二年（一四五八）であるから、計算が合わない。即ち養叟の生前に関山の百年忌は無かったことになる。養叟のこの関山和尚百年忌拈香之頌を信じて、仮りに養叟の没年の前年、一四五七年に百年忌があったとしても、その百年前つまり一三五七年に関山が没したことになり従来の一三六〇年説よりも三年早くなる。妙心開山の百年遠忌に大徳寺の僧が拈香し偈頌を称えるなら、それは現役の大徳寺住職より他に無い。という推察をすれば、養叟の大徳寺住職は文安二年から三年間であるから、百年忌は一四四六年前後になり、関山の没年は一三四六年前後となって従来の説より十三、四年逆上ることになる。今一つの推察は、この語録は永享年号のものは中で寄せてあって、その間に百年忌の頌が入っているので永享年間に百年忌があったのではないかという事である。そうであれば一層逆上って従来の関山没年説よりも二十年程古くなるわけである。養叟の没年は大徳寺に自筆の遺偈があり、それには長禄二年の年号が入っているからこれは動かない。関山の延文五年没年説は正法山六祖伝からくるのであるが、著者の雪江宗深は文明十八年に七十九才で没しているから養叟よりも三十才後輩である。しかもその著の正法山六祖伝の寛永版（寛永十七年、一六四〇年刊）というのは誤りが多いので有名で、最も信頼されたとする古写本も慶長五年（一六〇〇）（古くは花園大雄院蔵という）であり、この養叟語録の筆写年代より七十三年も新しい。果してどちらを信じたら良いのか、又別な確実な資料の開発を待つより方法はないものか。今は疑問を提起するに止める。なお原本養叟語録は真珠庵蔵である。

なお資料二篇とも他に校勘すべき異本が無いので筆者の責任に於て校訂した。古い俗字はすべて正字に直し、当用漢字のあるものは当用漢字を使用、疑問の解けない箇所は原本のままにして校訂しなかった。資料一の方は原本は白文、資料二の方は原本は点のみ打ってある。区分番号は原本にはない。以上の論文と新資料に関係ある大灯下の法系図を参考に作った。

「華叟宗曇とその門下」関係法系図



資料一

大日本国、江州路、志賀郡、堅田庄、太平山、祥瑞禅寺、開山大機弘宗禅師、今以其行実、謹準塔牌。

前住竜宝山、大徳禅寺、後住大慈雪庵宗圭。　　篆蓋。

蝼制窟中偏易反中子焼拝揩書之。

師諱宗曇、華叟其号也。播州揖西県人、生于藤氏。八歳始到京師、礼徳禅開山徹翁和尚、為師十有四歳剃染、乃典侍局、親侍翁之巾瓶。定省不怠、禀性純粋端直、故翁喚之曰仏心。翁順世之後、一十八歳随侍雪翁和尚。廿三歳而再遷大徳寺、此時蔣山和尚端居方丈、師謁山求参禅。山云、老僧住持事繁、你師兄言外属者住徳禅、且去参見。師便詣徳禅、就外索参請。外云、何不問山麼。師乃挙前事。外唯喏容之、仍命師作書記。自爾昼参暮咨、不敢退転。一日迄挙揚拈華微咲因縁、深透徹矣。故号曰華叟。親受旨訣、為外之的子、猶如慶喜継飲光。于時明遠為言外之侍者。毎語遠云、於世尊拈華話、曇書記一人深徹其旨也。外滅後遷江州、安脇禅興庵、安逸歳久矣。養叟頂首座、径往扣其室、要明這事。師曰、自得印証二十年、不道仏法二字、今日始為你開口。云々手段孤哽、敵其鋒者鮮矣。師問曰、如何是禅興。頂云、来風深弁。師曰、弁底霊。頂云、露。師曰、転向那辺去。頂云、再犯不容。師便打。又問曰、如何是禅興境。頂云檻前山青水寒。師曰、恁麼則天際日上月下。頂云、正与麼去時如何。師曰、聖人復生。頂便礼拝。師因七夕垂示曰、一句了然超百億、如何是七夕一句。或云、七九六十三。或云、是什麼心行。或云、去却一拈得七。或云、銀河一帯水悠々。尼云、勘破了也。師曰、那一句総無人道著、三寸舌頭付与阿誰。衆皆退。師

因明月垂示曰、月離中峰玉一団、為什麼千眼看不見。願云、作賊人心虚。師曰、意旨如何。願云、天高地厚。師休去。師問曰、煙雨渋々、遍界清涼、是衲僧第幾機。願云、第八機。師曰、何不道九十。願云、謹謝和尚開示。師曰、正与麼去時如何。願便礼拝。大智侍者問南浦和尚云、林際入門便喝、徳山入門便棒、如何是和尚門庭。浦云、従門入者不是家珍。侍者便喝。浦云、竜頭蛇尾漢。侍者擬議。浦把住趁出。師後来集衆、代侍者喝処拶曰、如何是家珍。或云、侍者点茶来。或云、高着眼看。師便打。秀侍者辞師赴洛之時、師問曰、路逢死蛇莫打殺、無底籃子盛将帰。侍者応諾。師肯之。江州堅田祥瑞庵、請師為第一祖也。師従禅興庵遷塩津高源院、臥病七稔。一日以印証之語一帖子法衣一領、付嘱願首座曰、吾道至爾大行乎世。正長元年六月念七、援筆書一偈曰、滴水滴凍、七十七年。一機瞥転、火裏酌泉。擲筆逝矣。世寿七十七、坐夏六十五。法嗣一人、養叟願和尚是也。所度門弟若干人。師遷化後、

後花園法皇、下敕為大徳之前住、又敕諡大機弘宗禅師。宸翰曰、徳者依道自彰、名者随行惟貴。天之成美、世之所恭。爰前住大徳華叟和尚、受大灯的伝之宗旨、興林際正脈之玄風。寔是法海之霊珠、禅林之翹楚、肆飾称誉於旧碑、揚徽号於新墨。諡曰、大機弘宗禅師。宝徳四年六月二十七日、門人謹署師大略。

寛文二年壬寅、夏六月廿七日。

塔主遠孫比丘宗圭立之。

資料二

養叟和尚法語（〔　〕内は原文を示す）

(1)広徳寺棟公知蔵禅師下火

元来這是、家舎棟梁。雲□□□、徧界不蔵。恭惟、新帰寂前住広徳禅寺棟公知蔵禅師、胸次洒落、眼界彷徨。銀山鉄壁、直裝飾広徳之刹。当機覿面、曾依付如意之場。除却四十九年閑落索、截断五千余巻波羅娘。正与麼時、破夏来不終夏去、捉襟見肘。昨日死今日活、応病施方。会則途中受用、巍々堂々。不会則世諦流布、煒々煌々。何故如是、咦、且道諸人還知棟公典蔵行覆処麼。挙火把云、薫風自南来、殿閣生微涼。便擲

(2)宗潭侍者下火

以火把子、打円相云。宗潭侍者、末後有偈。当機覿面、飲気呑声。遊戯神通、拳来踢報。咄、顧前顧後、木馬嘶風。突難弁、畢竟如何。千里万里一条鉄。恭惟、新帰元宗潭禅人。来在老僧会裡、究明己事畢。坐定大安楽之場、正□□依□遺偈。且着語、且唱和、而以餞此行者也。平生心膽、為誰流通。仏祖無分、明月清風。咦、便擲下火把。

(3)為宗津侍者之秉炬

忽爾帰源、大家津送。二十二年、做珠玩弄。恭惟、新円寂宗津侍者、平生受用、万端空洞。苦楽逆順、是道是禅。動静寒温、且悔且痛。何故如此。古路之鉄蛇、丹霄之彩鳳。畢竟明得与麼事、諸人会麼。以火把打円相云、一滴一凍、歛力冉切、収也聚也。

(4)宝岩道珎上座下火

打円相云、宗門家珎、誰不担荷。昨夜失却牛、天暁失却火。恭惟、新物故宝岩道珎上座〔坐〕、我辜負你、你辜負我。何故、一句合頭、那時羈鎖。三十一年之受用、水緑山青。百千劫来之行覆、雲歛〔敛〕月堕。正恁麼時、説甚麼七九六

十三、説甚麼両片皮耳朶。離家舍不在途中、恁麼々々。在途中不離家舍、不恁麼々々々。且道還郷一著□、刺破諸人眼睛底。即是一ヶ珎上座、却莫有相見分麼。以火把子、点一点云、囚、無可無不可。

(5)智玉首座大姉〔師〕下火

玉転珠回、七花八裂。只麼取拾看、紅炉一点雪。恭惟、智玉首座大姉、当生不生、入滅不滅。柳緑花紅、月白風潔。預植七分全得之善因、遊戯三昧。曾会三句体調之深旨、法喜禅悦。脱却男女之形相、笑倒祖仏之言説。凌行婆機輪、劉鐵磨余烈。拄杖子徒提、皮下無血。鉢袋子空擲、口裏無舌。此是今時底。臨行忽訣別且道、末后一句如何道。以火把打円相云、鑊湯無冷処、万里一条鉄。逆修下火

(6)逆修天心祐大姉秉炬

劉鉄磨曾参裕師、魚行水濁浪淋漓。天心亦会山翁旨、江月照兮松風吹。恭惟、景愛首座天心大姉。仮来仮去、絶毫絶氂。早入弘済之丈室、親受誨励。又創妙善之小築、自安棲遅。玄関綿包毒石、機輪嚢盛尖錐。七分全得預植善利、万劫勝因別立生涯。雖是有作白業、畢竟無孔鐵鎚。応物現形、不論苾蒭尼。舞手蹈足、還他師子児。古者云、秋潭月影触波瀾而不散、静夜鐘声随扣撃以無虧。猶是生死岩頭事、且道何故如斯。只為三々九々、萎々随々。別別。祐大姉即不然、即今現歇大人風姿、諸人還知麼。以火把打円相云、拄天撑地、仏祖不知。

(7)玉庭明珎大姉下火

珎重花謝、蘇嚕薩訶。拄天拄地、如之若何。恭惟、新帰寂玉庭明珎大姉、石女起舞、木人唱歌。恢々焉哩々羅。二十八年己前、鉄裏綿団。二十八年己後、箭過新羅。如是見得則、主眼拶倒七賢女。如是受用則、全機追配凌行

婆。正与麽時、台山路驀直令去、大潙前只麽透過。且道、諸人還知珎禅人安身立命処麽。脱或未然、聴取火把子説話。打円相云、到江呉地尽、隔岸越山多。

(8)真守大姉下火

性体堅守、三十三年。驀路築着、撑地拄天。恭惟、新円寂真守大姉、一息已尽、三句是玄。三々九々、燧焠息煙、千々万々、清浄本然。不用平生之事、仮執遊戯之権。正恁麽時、疎雨濛々、芳草芊々。時節已到、仏祖不伝。諸人還会麽。看取火把子説話。打円相云、只麽花開火裡蓮。便擲下

(9)春林香大姉下火

香厳童子、聞香発明。露柱拍手、月白風情。恭惟、新円寂春林香大姉、何干五障、快過一生。一衣一盂、曾為通幻師之神足。全機隻眼、誠慕劉鉄磨之姓名。恁麽々々、穿過鼻孔。不恁麽々々々、換却眼睛。六十七年已前事、義以順愛以合。千里万里一条鉄、描不就画不成。正与善時、春林香大姉、安身立命処、誰敢要問程。琉璃殿上知識没、碧波心裡玉兎驚。即今臨行火浴底一著、諸人還会麽。且看火把子露出。以火把子打円相云、無風荷葉動、決定有魚行。

(10)明庵如精禅定尼、預求秉炬之語、書以□之請云。永享十一六月日、前大徳養叟恪書。

是一精明、充室堆席。只管由之、風清月白。恭惟、明庵如精禅定尼、快破三従、不堕旧格。眼裡須弥、耳裡大海。自従〔人〕大愛道尼。末上法号、肩上緇衣。曾受春屋禅伯。所以道、趙州恁麽勘、台山路上之道驀直去。岩頭直下打、老婆手中之児水裏擲。正与麽時、十方同聚会盍黄頭老、一毫未発□逢穿耳客。即今明庵禅人、還家穏坐底一

句如何道。打円相云、山疊乱青、水漾虚碧。

(11)為貞訓禅尼秉炬

宝訓一言、和々哆々。只管由之、帰家穏坐。恭惟、新物故貞訓禅定尼、懿徳柔順、貞潔担荷。三十八年前、月白風清。百千億劫来、霧斂雲鎖。与麽蓋覆勦絶、則無不契証本分之田地。如斯縦横自由、則無不截断生前之耳朶。所以道、昨夜三更失却牛、天暁起来失却火。何故如此。天弊(毀)云解、天袤云堕。我辜負你、你辜負我。且道、諸人還知訓禅人臨行覆践処麽。脱又不然、聴取火把子説話。以火把打円相云、木凋葉落畢、無可無不可。囮。便擲下

(12)心源宗本居士下火 養叟和尚法嗣 顕室和尚。

虚廓性体、本地風光。機輪転処、徧界不蔵。恭惟、新物故某、丈夫志気、仏祖肝腸。遊戯自在、通暢十方。清寥々白的々、峭巍々露堂(当)々。全是無滅、豈論有存有亡。天絶四壁、地絶八荒。斬釘截鉄、不要商量。雖然恁地、諸人還会宗本居士臨行一条活路麽。以火炬円相云、日輪夜半照扶桑。

(13)宗因大徳十三年忌拈香

這香、何必善因招善果、一条生鉄鋳金剛。十三朞月無今古、這是当頭不覆蔵。恭惟、大日本国山城州、平安城居住奉菩薩戒弟子妙性、干時永享三年四月十二日伏値、先考宗因大徳一十三回忌之辰。就于私第、営備香華灯燭茶果珍饈之儀。於日前一七日之間、供仏斎僧、朝誦夕唱、勤行不怠。即懺摩之儀一坐、頓写妙典一部、今当斯散忌。謹拝請現前清衆、同音諷誦大仏頂万行首楞(厳)厳神咒之次、借手於山野、焼此妙兜楼婆。以供養十方仏陀耶衆、達磨耶衆、僧伽衆、果界賢聖、釈梵天衆等、現座道場、観音薩埵。所鳩善利、奉為覚霊荘厳報地、資助冥福者也。伏

惟、宗因大徳。其誉霑欝、惟徳茫洋。治生産業、色々依旧現前。出自家珎、物々于時挙揚。供僧則曽作伊蒲饍於閭里之際。従師則親受毗尼戒於報恩之場。為其弟子得其道、為其参侶升其堂。頭々雖異轍、歩々不迷方。物故一句、覿対非常。此是在日用不尽底三昧。且道、一十三年已前、我不識他。一十三年已後、他不識我。彼此不相識、如何正商量。当生不生、雖亡不亡。鑊湯無冷処、花枝自短長。所以謂、薫風自南来、殿閣生微涼。時節已到、其理自彰。薬病相治、尽大地是薬。滴水滴凍、斎時慶讃時。菩薩子喫斎、一陰一陽。剗除満地荆棘、顕露倚讃鋒鋩。何故如此、積善家必有余慶。即今宗因大徳。来這裡有与諸人相見分麽、有也。挙香云、水晶簾動微風発、満架薔薇一院香。

(14)前備州太守集竜院殿善長元居士十三年忌之拈香

此香、以元字脚不当胸、前後三々瀟洒絶。瀟洒絶処太分明、只有香煙暫薫徹。大日本国、山城州、平安城居住奉三宝弟子持長、是歳永享四年十一月十四日伏値、先考某一十三年之諱辰。就于洛之滋井山明栄禅刹、棄捨浄財、放施家資。営備香花灯燭茶果珍饈之儀、預於日前、繕写大乗妙典一部、頓写一部、諷誦円通三摩一座、施食金文一会、今当散忌。供仏斎僧、謹拝請現前雲侶、同音諷演大仏頂万行首楞厳神咒之次、借手於小比丘宗願、焼此妙兜楼婆。以供養尽十方界仏陀耶衆、達磨耶衆、僧伽耶衆、本師釈迦如来、当来下生弥勒仏、文殊、普賢、観音大士、果界賢聖、諸大薩埵、声聞縁覚、釈梵竜天等、現座道場、地蔵菩薩。所鳩善利、奉為懿霊荘厳報土、資助冥福、以至与法界含霊、同登覚岸者也。恭惟、某、弓矢世家、駒馬閥閲。取爵位立名績、使人拭目観。登師伝播学徒、属者教心悦。嗣子伝齧鏃之機、挙世習彎弓之説。小魚呑大魚、千古倚陰搏陽。有句与無句、三人証亀成鼈。

師於華峰而親受衣盂、曳々葛藤。祖於白雲而遠定宗猷、綿々爪瓞。曾見秋月五十余穀、既革古路千万劫轍。雖処世間常住相、須知斧頭元是鉄。此是在日常受用底作略、月白風清。厭世以来覆践底事（底ノ字、原文ニナシ）、山青水潔所事、山青水潔。所以〔底〕道、横拈倒用、百醜千拙。釈子所帰敬、焚書坑儒絶不伝。衲僧家作用、殺仏害祖須見血。正与麼時、法身三種病二種光、金体一人口両人舌。松枝払尽、梅花漏泄。無断故本地風光、不可失好箇時節。何故、塡溝塞壑、七花八裂。拈了也。別々、我箭亦具過西天（天西）之変通、君弓更有絶等倫之妙訣。一十三年已前、只管恁麼。一十三年已後、豈不提挈。雖然如是、説甚麼古今星霜、論甚麼動静寒熱。咦。君張弓兮我箙矢、彼此都是大休歇。与其等閑称誉、孰若即今親褻。且道、諸人還知相見処麼。挙香云、莫怪相対不相知、夜深同看千岩雪。

(15) 南谷宗金大姉二十五年忌之拈香

此香、根蟠宇宙、葉（根）茂碧天。則金剛体、充塞大千。厳阿某年月日伏値、先妣某二十五白之忌辰。就于私第、預於今月廿六日、虔営香花灯燭茶果珍饈之儀。命現前清衆、同音諷誦首楞厳神咒之次、借于小比丘山野手、焼此妙兜楼婆。以供養尽十方仏陀耶、達磨耶、僧伽耶衆、果海賢聖、諸大薩埵、釈梵竜天等、現座道場、観音大士。所鳩善利、奉為覚霊荘厳報地、資助冥福、以至増崇道果者也。恭惟、某、懿徳従順、和気靄然。早授衣盂於高崖和尚、又受讃語於春作老拳。迷時心内按片石、悟時水上浮鉄船。畢竟無迷無悟、何故有実有権。正与麼時節、冬至在月頭売被買牛坤六断、冬至在月尾売牛買被乾三連。冬節来日、月尾今年。所以趙州未上見崔郎中、普化入来指老婆禅。此是神通遊戯三昧底、（禅）追忌因斎慶讃因縁也。即今宗金大姉、現大人相、在諸人眉毛眼睫上突出。又与道人有交肩、此一衆還莫有相見麼。若或未然看山野指点。挙香云、金香爐上裏香煙。囲。冬至前一日。

(16)明仙禅尼七周忌之拈香

此香、竺土大仙、心々不異。只管由之、張三李四。大日本国、近江州路、上坂郷内、性通禅口住持苾蒭尼、祖秀、時永享十年七月十二日伏値、先妣某七周忌〔用〕之辰、預於四月十二日、虔備…中略…之儀、作善若干等。謹拝請緇白之諸衆、開斎筵。諷誦白傘蓋神咒之次、借手於山野、焚此妙兜楼婆。小比丘為不請之勝友、猥打葛藤焼沈水。以奉供養尽十方界仏陀耶…中略…等、為覚霊荘厳報土、資助冥福、以至浅世縁、深道根者也。恭惟、先妣明仙禅尼、慈愛以和、美誉惟懿。侍従僕隷、于々翼々、陳年滞貨。織婦耕男、忻々衎々、路傍弊覆。雖然如此、喚男呼女、弄孫抱子。悉是無不本地風光、本来田地。此是数十年已前事。今已七周忌辰、云至如何弁端的。昔不生今不死、花不紅柳不翠。説甚麼結制解制、説甚麼祖意教意。以大円覚為我伽藍、心身安居平等正智。古徳皆言、一口吸尽西江水、洛陽牡丹新吐蘂。正与麼時、臨済問善来悪来、尼便喝半合半開。潙山喚老牸牛来、磨便答是一是二。所以道、慧炬三昧、妙荘厳王三昧、法喜禅悦神通遊戯。三句体調、両人倒起。吽吽、即今明仙禅人、既現大人相。上三十三天、帝釈鼻孔裡争真偽、還下中庭、突出諸人眉毛眼睫上、作大仏事。諸人還理会得麼。若或未然、看山野指示。以香点一点云、天上人間正眼難視。喝一喝。

(17)為経一禅尼拈香之法語

盤根錯節、一柱孤絶。如今不蔵、徧界薫徹。伏惟、経一禅尼、懿徳柔精、成敏貞潔。抱子抱孫、綿々爪瓞。念仏念法、色々旧轍。此是在日受用底作略。且道、転身一句子、如何為君訣。透得祖師禅、魔墨摧折。盧老睦州、作養百醜千拙。釈迦弥勒、無分七花八裂。出身与蔵身、不許証亀作鼈。有句兼無句、莫笑斬釘截鉄。其子得一果、

其母得一橛。此□不可説、何故不可説。寒時普天普地寒、熱時普天普地熱。即今経一禅尼。来這裡与三世諸仏、歴代祖師、執手共行、話尽山雲海月。所以謂、喚西作東方、当夏行冬令。師僧家別々、我辜負汝、汝辜負我底一句乃説去。挙香云、夜深共看千岩雪。

(18)妙心開山関山和尚百年忌拈香之頌。

不知仏法正耶邪、滅却還他老骨槁。微笑春四百年後、祖園猶有一枝花。

(19)珎阿禅尼之拈香

這香、恭惟、珎阿禅尼卅三年、去年今年悲風動。両賽一彩有誰知、香煙穿過君鼻孔。何故、君現大人之相、那箇是大人相。顧視左右云、囚。以墨汁盛黒漆桶。永享七年五月十二日、正当三十三年依忘却、如今八年三月廿六日設斎。

(20)写経銘云

女子衒売女色、仏祖説与仏心。畢竟如何、桃紅李白薔薇紫、問着春風都不知。正与麽時、口清大姉。即時成就仏身者也。那箇是仏身、囚。年号功徳主某合掌。

(21)乾用和尚納牌仏事

列祖大機、古今盍発。位次相干、是蒼竜窟。恭惟、前住当山乾用和尚、眼界雲山、胸次水月。歩々蹈却、向上之関捩子。着々截断、世間之悪芽孽。如今乃随例納牌、上古豈不類立碣。是法平等主山高案山低、公案現成、馬頭回牛頭没。正与麽時、諸人還道。挙牌云、是凡是聖。噫、直饒道得、祇是箇木橛。

(22)妙性寿像讃

妙性円明、離相離名。方袍円頂、寔何似生。筆力有神兮、色裏膠青。舌頭無骨兮、空中鉄釘。七九六十八、当的帝都丁。常搏于律虎於仏慧之檻、常牧于鉄牛於我法之城。是目之智源性公大徳者也。囚。妙性大徳写寿像以請讃故云。永享五年十月十日。養叟老拙。

(23)自讃

法社姦賊、僧倫内魔。殺尽生命、百万衆中起干戈。撓転機輪、一双眼裡撒土沙。阿那々。諸人也甚古曲、同道者方唱歌。竹箆子彎、目瞠口呿。嗄。右頭室西堂、図山野幻質、以請賛。不顧他日笑具、謾系卑辞云。享徳三、禩竜集甲戌冬節前五日、養叟老拙書。

(24)養叟和尚大徳寺退院上堂

単丁住山三稔過月、世縁道根共浅、苦硬清約以多、自顧看不勝戦汗之至。伏乞、衆慈亮察。恭惟、山門両序、東班諸位禅師、西班諸位禅師、東堂和尚大禅師、単寮耆宿、蒙堂、前資雲堂清清浄大海衆、現前一会諸位禅師。竜象蹴蹈、雷電迅機、各々扶起己墜之綱宗。人々支持傾仆之門戸。所以立人立境、覚自覚他。噫、褒讃有余、喜躍無任。伏望、各々道体起居多福。拈払子云、平明奉箒三年過、塔下纎一塵点無。不識当山真面目、只因身在此山隅。

(25)竜峯鴻臚郷、孚公禅人。出紙需別称、字日信庵、頌以懸矣。

慤実不差宜接賓、開門只麽莫逡巡。此心成熟透荆棘、天地之間是甚人。

(26)勤禅人、雅号有源、頌曰。

突出面前無不存、曹渓一滴溢乾坤。看来只管由之去、只管由之波浪翻。

(27)能禅人、雅称大川、頌曰。

倚天長劒勢非小、截断衆流還自閑。空闊々兮見無物、曹源一滴也潺湲。

(28)前南禅聖徒和尚。以心鏡二字目乞妙善勤仕女。其孝子、永観求頌於予、懸一偈以塞責。所謂狗尾続貂者乎。

一点霊光曽不昧、古今照徹自円成。何須句裡蔵機去、直打破来歌太平。

(29)永観禅閤、来索別称。以澄潭之目授云。

欄外山深水自浄、暁天醮影共誰寒。焦甎打着連底凍、不許蒼竜裏許蟠。

(30)直翁宗正道号。養叟和尚取出臨済徳山腸

屈曲松老、為蓋為陰。臨済徳嶠、劈腹剜心。

(31)宗久大姉別称長生、賦一偈以証之曰。

万年松矣八千椿、留得人間百億春。勘破霊雲不答処、一条活路発機輪。華叟老拙書。

(32)勢州鈴鹿郡羽黒山記 養叟和尚法嗣 顕室和尚。

大凡、本州、羽黒山者、巍然甚高、廓然甚大。四望如一夸奇競秀、方知不与彼崔嵬為類。絶頂有一株神祠、即是権現降鑒之地也。馬跡履跡今尚存焉。惟神之徳法、日月之昭明、配天地之広大。春秋享祈福応孔多。祠之東南数百歩、有地之勝。虺蛇所盧、狸鼠所竄、人罕能至。余率朋徒、偕来盤桓之久矣。後旬有五日、遂命僕夫、芟夷荆

棘、剗闢土壤、曠焉茫焉。心舒目行、考極相方、経之営之、創小室于茲。不劉椽不剪茨、不崇朝而木工告成、蓬戸草枢僅避風雨。怪石為屏、白雲為籬。邇含西嶺之雪、遠呑東海之碧。以極万類、攬不盈掌。洋々乎、与鴻蒙俱而莫得其涯。漫々乎、与希夷混而不知其所窮。是故、画師閣筆、詩人泥句。噫奥乎、造物者之無尽蔵也。将俾口人知、不貽林磵之愧、故為之文以記。今茲応仁二年冬十月也。北山遺老頭室叟筆。

(33)彼岸記

一日毗婆尸仏、二日尸棄仏、三日毘舎浮仏、四日拘留孫仏、五日拘那含仏、六日迦葉仏、七日釈迦文仏。竜樹菩薩正記云、夜摩天与兜率天中間、有所名雲処台。有額名中陽院、彼処有樹名七葉七樹。二月花開有七日落、又八月果□七日間。第四禅摩醯首羅天為上首、梵天、帝釈、四大天王、閻魔法王、五道大神、乃至道祖神、諸大小神、聚集彼処、七日間勘定人間善悪業。善人姓名、上押宝印、悪人姓名、上押鉄印。大論云、諸仏悉離煩悩到彼岸。凡夫深惑業猶在此岸。故宣取七日、所謂春秋七日也。彼岸一日斎戒、勝余百日。初一日帰依毘婆尸仏、二日尸棄仏、三日毘舎浮仏、四日拘留孫仏、五日拘那含仏、六日迦葉仏、七日釈迦文仏。毎日礼三十五仏、並虚空蔵。般若心経百巻時、沐浴著新衣鮮衣、勿食浄黒食。彼岸経云、若有人以飲食来、正中以後非時之尅、以之供養、施者受者共生餓鬼受無量苦。若人教一人勧持斎、此人更不堕悪、早証菩提果。雑譬経、昔檀越諸仏僧飯、有賈酪客至、因留其飯、勧持斎戒、聴法暮帰。婦云、我朝未飯、延待至今、強令相伴、敗壊其斎。半斎之福、七生天上、七生人間。一日持斎、有六十万歳糧。復有五福、一少病、二身安、三少婬、四少□、五生天、識宿命。

(34)賛摩利支天

三面六臂駄一猪、左弧右矢表天下。護持仏法掃魔軍、唵摩利支娑婆賀。

右三十二遍於勢之拈花山写之。大永癸未潤三月廿四日

右宗慧大照禅師養叟和尚法語

勢州鈴鹿郡関嶺鷲山下拈華山正法禅寺

第二世住玉英冏和尚墨痕

享保三戊戌歳五月上旬　亭山紹云証焉

印

（真珠庵蔵）